



藤田 貴敏

量子科学技術研究開発機構 量子生命・医学部門 量子生命科学研究所 主幹研究員
(前 理論・計算分子科学研究領域 特任准教授)



分子研への感謝

ふじた・たかし / 2011年3月神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間環境学専攻修了、学術振興会特別研究員、ハーバード大学博士研究員、京都大学博士研究員を経て、2016年4月より分子科学研究所理論・計算分子科学研究領域 特任准教授（若手独立フェロー）、2021年4月より現職。

2016年4月より2021年3月まで、分子科学研究所理論・計算分子科学研究領域 特任准教授（若手独立フェロー）としてお世話になりました。5年間の在任中には数多くの先生方、分子研に携わる職員の皆様の支えにより、充実した研究生を送ることができました。特に5年間手厚く支援していただいた川合眞紀所長、計算物質科学人材育成コンソーシアムを取りまとめていただいた斉藤真司教授、メンターとして様々な助言をいただきました江原正博教授には大変お世話になりました。私が予算面での支援をいただいていた計算物質科学人材育成コンソーシアム (PCoMS) は、東北大学金属材料研究所、東京大学物性研究所、大阪大学ナノサイエンスデザイン研

究教育センター、分子科学研究所で構成された、分野の垣根を超える若手研究者を育てようという趣旨のコンソーシアムです。支援されている研究者は他機関に滞在して共同研究を行うという仕組みです。私は東京大学物性研の杉野修教授の研究室にお邪魔し様々な議論をさせていただきました。また、およそ1年間博士研究員として当グループに滞在したMd. Khorshed Alam博士（現：Barisal大学助教）にも多く助けていただきました。分子研時代にお世話になった多くの皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。

研究以外の面では理論・計算分野の若手の方々との交流は糧になりました。今思うと飲み会ぐらいでしか集合してなかった気もしますが。ほとんどのメン

バーが他大学に栄転して集まれる機会もなくなってしまいました。分子研が人材育成のハブとして機能しているということでもあります。去る人もいれば来る人もいます。より若い方が新しく加わっていき、南実験棟4階の理論フロアも新しい雰囲気になっていると思われます。本稿を執筆している時点でも新型コロナウイルスの流行が収まる気配がありませんが、何かの折に分子研にお邪魔できればと思います。

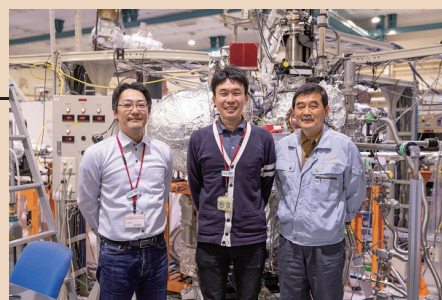
現在の私は茨城県の東海村にいます。年度初めは異動や新生活の立ち上げでのごたごたしておりましたが、ようやく落ち着いてまいりました。分子研で培った経験をいかしつつ、新しい研究仲間と新しい研究を始めているところです。

出田 真一郎

広島大学 放射光科学研究センター 准教授
(前 極端紫外光研究施設 助教)

UVSORでの思い出

いでた・しんいちろう / 2012年に東京大学大学院理学系研究科物理工学専攻で博士号（理学）を取得。2012年4月より東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻・日本学術振興会特別研究員、マックスプランク研究所・客員研究員、東京理科大学理工学部物理学科・助教を経て、分子科学研究所極端紫外光研究施設・助教。2021年4月より現職。



真ん中が筆者。

2015年4月より2021年3月まで、分子科学研究所・極端紫外光研究施設 (UVSOR) で助教としてお世話になり

ました。UVSOR職員として着任する際には久しぶりのシンクロトロン光施設だったため、その懐かしさと初めて

訪れる分子研への新鮮な気持ちをもったことを覚えています。UVSORでの私の生活は、ユーザー利用のサポート、

測定技術の開発、そして世界最先端の性能を誇るUVSORでの研究の3つになります。UVSORは共同利用施設として国内外から沢山のユーザーが訪れ研究を行います。そのため、これまでシンクロトロン光施設をユーザーとして利用していた立場とは逆にユーザー利用をサポートし、ビームライン及びエンドステーションの維持・管理に努めることになりました。ユーザーに使いやすい、より良いデータを得られるように装置の改良を行い、ユーザーから良い結果が得られたことを報告されると嬉しく感じました。

更に、分子研での生活を充実させてくれたものが、“人とのつながり”です。何か装置開発のことで困ったことがあれば技術職員の方々に直ぐに相談できる環境があり、共にエンドステーションやビームラインの維持・管理、更に

測定技術の開発に携われたことは私にとって非常に良い経験となりました。教員・技術職員の人数が他のシンクロトロン光施設と比較して少ない一方で、綿密なコミュニケーションにより職員間の雰囲気も大変良く、個性的な方々との日々の生活は大変面白く充実しておりました。印象深いのは、UVSOR施設前でのバーベキューパーティーです。その時節に応じた諸外国の研究者から学生、分子研職員まで、研究分野や職種の垣根を超えた幅広い人々の社交の場となっており、初めて参加したときの驚きは忘れません。これは、UVSORならではの文化で、施設の雰囲気良さが現れているものと思います。バーベキューパーティーや飲み会などの行事には、2人の子宝に恵まれたことに加え、2020年頃からのパンデミックの影響で参加及び開催する頻度が減っ

てしまいましたが、今後ともUVSORの良き文化として継続していただきたいと思っております（隙を見て参加させてください）。

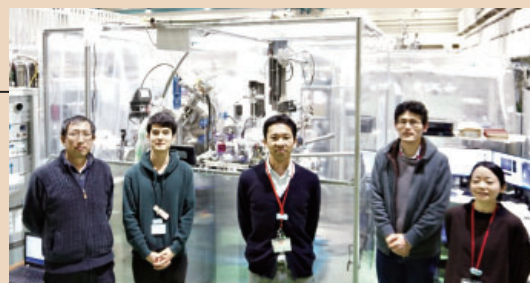
最後にUVSORの田中清尚准教授、小杉前施設長、解良施設長をはじめとする数多くの先生方、UVSOR技術職員の皆様、秘書の萩原さん、稲垣さん、石原さんに支えられて、非常に楽しく有意義な6年間の研究生生活をUVSORにて送ることができ感謝申し上げます。現職の広島大学の放射光科学研究センター(HiSOR)は、UVSORのように小型シンクロトロン光施設でUVSORとの連携協力が現在推進されています。今後とも何かとお世話になると思いますので、引き続きよろしく願いいたします。

長谷川 友里

立命館大学理工学部物理科学科 助教
(前 分子科学研究所 IMSフェロー)

分子研で得たこと

はせがわ・ゆり / 2015-2017年度 JSPS 特別研究員 (DC1)、2018年3月筑波大学数理工学物質科学研究科博士後期課程修了。博士 (工学) 取得、2018年度原子力研究機構原子力科学研究所博士研究員、2019-2020年度自然科学研究機構分子科学研究所 (解良グループ) 博士研究員、2021年度より立命館大学理工学部物理科学科助教、JSPS 海外特別研究員。



右端が筆者。

分子科学研究所UVSORには学生のころからユーザーとしてお世話になっていました。博士を取得してから最初に就職した研究所で進路に迷っていたころ、解良グループの博士研究員として採用していただきました。1年目は、国内外からのゲストが研究室やUVSORに頻繁にやってこられて、教えられたり教えたりしながら装置を動かしました。特に海外からのゲストとの対話に苦労し、メンタルが鍛えられました。

UVSORでのマシンタイムにも多く

参加させていただきました。2年目から特に、Momentum Microscopeの立ち上げに邁進する松井先生の元で、非常によく指導していただきました。解良先生と松井先生の指導のもと、お二人のセンスを垣間見ながら研究を進めるという稀有な時間を過ごさせていただきました。博士課程2巡目かのような心持ちになることもありましたが、おかげで、学生だったころには想像もできなかった課題に取り組むことができました。放射光実験に対しても1年

目のころよりタフになりました。

研究を支援してくれるスタッフの方々との距離感も近く、その方々との交流も忘れられません。URAの方には進路相談にも気軽にのっていただきました。これまで、博士取得後の進路については研究職一択であり非常に狭き門であるという印象が強かったです。研究以外でも科学の分野を活性化したり、役に立てる仕事があると知り選択の幅が増えました。分子研内外の研究者との交流も多く、様々なコネクショ

ンができました。これは若手研究者にとって貴重な財産になるものです。実験の待ち時間や研究の進まないとき、他の若手研究者との雑談も非常にありがたい時間でした。

新しい仕事場は立命館大学(BKCキャンパス)にあり、放射光施設SRセンターがあります。非常に古いけれどSTM装

置もあり、整備するところから始めています。UVSOR実験ホール内や解良グループの実験室の、最新の装置や長年の整備と改良を得てきた装置の凄さに改めて思い至ります。振り返ってみると2年間ばかりでしたが若手研究者としてよく育てていただいたと思います。分子研での成果を世に出す半ばに

あるのですが、そちらも全力で取り組みつつ、これからはもう少し背すじを伸ばして、研究や教育についても成果を還元できるよう頑張っていきたいと思えます。

武田 康太 東京大学大学院農学生命科学研究科 特任助教 (前 生命・錯体分子科学研究領域 特任助教)

分子研にて分岐点

ただだ・こうた / 2015年3月東京農工大学大学院工学府生命工学専攻修了、大野・中村研究室にて博士(工学)取得、学術振興会特別研究員を経て、2016年1月東京農工大学グローバルイノベーション研究院・特任助教、その間2016年4月から2017年3月までマックスプランク化学エネルギー変換研究所・客員研究員、2020年4月分子科学研究所 生命・錯体分子科学研究領域・特任助教、2021年4月東京大学大学院農学生命科学研究科・特任助教(現職)。



2021年4月に、東京大学大学院農学生命科学研究科の五十嵐圭日子教授の研究室に転出いたしました。分子研では青野先生のグループで、細菌の酸素走化性制御に関わるヘム含有酸素センサータンパク質から走化性シグナルタンパク質のヒスチジンキナーゼへのシグナル伝達機構の解明について取り組みました。大きな目標である複合体の構造解析にまで辿り着く事が出来なかったのは残念ですが、私の専門であるタンパク質電気化学測定で、同グループの村木先生との研究に貢献でき、在籍中に共著として論文成果になったことは嬉しく思います。分子研に着任したのは新型コロナウイルスによる最初の緊急事態宣言の直前の頃です。そこから収束の兆しもまだ見えないうちに岡崎を去ることになりましたので、分

子研を含め岡崎での人的交流が少ないまま転出したことはやや寂しく思います。一方で、所内では感染対策がきちんとなされていたので研究自体が中断されることもなく、元々、分子研は少数精鋭な組織なこともあって、静かな環境で研究に集中した時間を過ごすことができました。

研究以外では、結婚、妻の妊娠と大きなライフイベントを迎えました。夫婦共働きでしたので結婚を機に、自身のキャリアプランについて非常に悩みました。当初、分子研では少なくとも2~3年は腰を据えて研究をするつもりでした。また、次の公募予定先を妻の勤務地である東京に限定することにも大きな不安がありました。ただでさえ明確なキャリアプランを示す事が困難なアカデミックポストにおいて、家

族としてのライフプランをどうすべきか思い詰めていたところに、渡りに船で、現職の東大での公募の話が舞い込んできた次第です。ポストが決まり、転出直後、無事に第一子を授かることができました。今はワークライフバランスに苦心しつつ、研究と育児を楽しんでいる毎日です。最後になりますが、ご指導いただきました青野先生、村木先生に深く感謝申し上げます。事務的なサポートを頂きました中根さんをはじめ、分子研で関わった全ての方にこの場を借りて感謝申し上げます。